（二）

美代子は此上周造と顔を合すのが厭であつた。特にも齋藤辯護士や祖母の前に彼と逢ふのは堪へがたい辱であつた。事によると、早瀨は長い間に、咲子は二人の秘密を洩してゐるかも知れないとすると、其を何時何處で周造が咲子の口から聞いてゐるかも知れないと云ふ氣がした。早瀨にそんな輕率なことがあらうとは思へなかつたが、どんな機で咲子に話さないとも限らなかつた。其が果して事實だとすると、彼女は周造の歸るのを待つて、齋藤の前に自分の罪を糺されるであらうと思つた。

幸ひなことには周造は何時まで經つても歸つて來なかつた。日が暮れても、夜になつても音沙汰がなかつた。齋藤が待あぐんで引揚げてしまつてからも、歸らなかつた。然し時が延びれば延びるほど、彼女の苦痛も長かつた。

惱しい一夜が明けた。美代子は周造の歸らない前に、自身處決するより外ないやうな氣がして、一晩中その事について考へてゐた。

で、七時頃　彼女は何時ものとほりに、身裝を整然として、祖母の前へ『お早う。』を言ひに行つたが、祖母には夫婦間に如何な問題があるか詳しく解らないので、周造が昨夜歸らなかつたことを、甚く氣の毒に思つて、極惡さうにしてゐた。美代子は一層心苦しく思つた。で、事によつたら今朝は一寸實家へ歸つて、事實を告白しないまでも、其となく母に話しをして離緣を取ることにしやうと肚で思案をしたが、愈よそこまで度胸を決めてしまへば、此の場合少くとも周章ることはないと、然う思つてゐた。

するとお晝近くになつてから、齋藤が何處からか周造をつれて歸つて來た。

美代子は自分から出て行く氣もしなかつたので、顔も出さずにゐると、それへ齋藤がやつて來て、不安げな表情で靜に話しかけた。

『今も途中で周造君の話を色々訊いて見たのですが、先生の言ふ事は、貴女の結

婚以前の生活、以後の周造君に對する態度について、飽き足りない點があると云ふのですが、何かさう云ふ事實でもありますか。』

美代子は待ち設けたことなので、別に驚きもしなかつた。で、暫く自分の態度を決しかねて、忸怩してゐたが大分たつてから反問した。

『それには何か根據でもあるのでございませうか。』

『いや、根據と云つては別にある譯ではないやうですが、色々の事實を綜合してみると、貴女と早瀨といふ人との關係について、疑ふべき點が多いといふのです。それには貴女と藤野さんと云ふ貴女の姉さんとが結婚以來一度も往來をしたことがないばかりか、病氣で苦しんでゐる藤野さんの今の境遇について、現在の妹の貴女が何も知らないと云ふのも可笑いし、早瀨と云ふ男が、背かれた藤野さんのために、出來るだけの力を盡して何彼と心配してゐるのも不思議だ。これにはお三人の間に何か複雜な戀愛上の經緯があつたに違ひないと、まあ先生は言つてゐ

るんです。其の點で以て先生は媒介者としての私の責任を問ふと云ふ始末で、私としてはこれは貴女の御辯解に待つより外はないのです。』

『それならば、全然無根といふことはできないかも知れません。其は周造にも話したとほり、姉が私と早瀨さんとを結婚させやうとして、心にもない人と一緒になつたことは事實なんでございます。』

（三）

『で、それは姉さんの思違ひだつたのですか。』齋藤は一層不安げな目をして、微聲で訊いた。

美代子はちよつと節のつまつた愛らしい指頭でそこに落ちてゐた絲屑を捻つてゐたが、もう何もかも諦めたと云ふ風で、『それは私には言へませんです。』

『言へない。』

『周造の想像に任しておくより外はないことだらうと思ひます。』

『何うしてですか。』 齋藤は髭を弄りながら訊いた。
『事實そんな事があつたと云つても、無かつたと云つても、結果は同じたらうと存じますの。』 美代子はやつぱり俛いたまゝで、『周造が一度さう思つた以上、その考は何時までも附いてまはるだらうと思ひますの。それを打消す力は今私にはございませんから。』
『けど、實際無根のことであつたなら。貴女は飽迄も自分の明しを立てなければならん。』
『え、ですけれど、其は詰らないことだと思ひますわ。』
『何うしてゞすか。』
『私が若し、姉の許婚の早瀨さんを、或意味で愛してゐたとしても、それまで告白する必要はありませんもの。』
『いや、お待ちなさい。』 齋藤は自分の耳を疑るやうに、『貴女は早瀨君を、何う

いふ意味で愛してゐたと云ふのですか。』
『それは私にも解りませんの、でも愛してゐたことは愛してゐたかも知れませんわ。』
『で、その上の關係は……それは無論なかつたに違ひない。』 齋藤は獨で決めるやうに言つた。
美代子は其上何にも言ふまいと思つて堅く口を噤んでしまつた。
『關係がなければ、それで可いのです。若い婦人が心に思つたことなど、外間から容易に想像できるものぢやない。それまで問ふ必要はない。』 齋藤は彼女を勇氣づけるやうに言つた。
『それあ然うですけれど、私自分で心に咎めることがございますから、此を機會として、事によつたら母と相談して、實家へ歸らうと思つてをりますの。』 美代子は深く思ひ入つた風で言出した。

齋藤は驚きの目を彼女の顔に見据ゑた。
『心に咎めるとは。』
『周造は飽足らないと云ふ、其の事なんでございますの。』
『では貴女は周造君に滿足を與ふることができないから、責を引くといふのですか。』
『え。』
『けど、それは詰らんぢやありませんか。滿足を與ふることができなければ、與へるやうにして戴かなくてはならん。』
『それが私には出來ませんの。』
『出來ない！』齋藤は困惑の色を浮べた。『だから貴女の意志でもつて、それを力めなければならん。』
『え、ですけれど、一度夫婦間の氣分が壞れますと、生涯恢復のつく時がないだ

らうと思ひますから……』
話がしばらく決しなかつた。すると其處へ周造もやつて來て、昨日出て行つたときとは全然違つた落着を見せて、二人の傍に座を占めた。
『貴方の滿足を得るやうな、何か明瞭した辯解がありましたか。』周造は目元に皮肉らしい微笑を帶びて言つた。
『それを今色々訊いてゐる所だがね、格別これと云ふ證迹もないやうだね。』

（四）

『證迹がない？』周造はわざとらしく言つて、『證迹がなければ結構ぢやないか。』
『だから君も、餘り神經を惱まさないで、少し冷靜に考へたら何うだ。』
『けど僕の言つてるのは、證迹の有無ぢやない。して又美代子が、自分の弱味を見せるやうな女だと思ひますか。』
『いや、それは違ふ。』齋藤は押止めて、『奥さん自身は、君に滿足を與へること

ができないくらゐなら、身を引くと云つてる位なんだ。』

『身を退く？』周造は眉をぴり〳〵させて、『身を退くのは面白い。どこまで勝利者にならうと云ふ氣なんだ！　退くなら退いてもらはう。』

『いや、その位に自ら責めてをられるのだから……』

『違ひます。それは齋藤さん違ひます。貴女は媒介者です。初めから美代子の辯護人なんです。それが僕には迷惑なんです。』

『まあ靜かにしたまへ。しかし事實のないものを……』

『事實調べなんか、不斷法律に囚はれてゐる貴方のやうな人間のすることです。僕はそんな事を言つてゐるんぢやないんだ。美代子が身をひくといふのなら、潔く退かして下さい。』

『そんな亂暴を言つちや困る。君のやうに然う一刻に言つて了つたのでは、問題にも何にもなりやしない。』齋藤は笑つて、『奥さんが身を引くといふのは、自分の責任を重んずるからで、必ずしも其が希望ではないのだ。』

先刻から默つて俛いてゐた美代子は、此時ふと面を擧げた。

『私の今申したことは、そんな意味ではございませんの。』

『それは解つてゐます。貴女の意志は十分解つてゐる。だが……』

『そんな意味ぢやないつて？』と周造が美代子に向直つた。『お前の意味は聞かなくとも己が知つてゐる。お前はどこまで己や齋藤さんを馬鹿にしやうと言ふんだ齋藤さんは左に右、己はこの上お前と口を利く必要はない。』

周造はさう言つてぷり〳〵して又彼方へ行つて了つた。

『私は一旦實家へ歸して、戴きます。』美代子は大分たつてから含涙んだ目をして、齋藤に言つた。

『私はこんなに迄侮辱されて爰に居やうとは思ひません、いづれ此事については母がお話をするだらうと存じますから。』

『然うですね。』 齋藤も力及ばないと云う風で、『では何うです、是からちよつと御母さんに來て頂いてその上のことになすつたら……』

『えゝ、それも然うですけれど、母が參りましても同じことだと思ひます。それよりか私が歸つて、よく事情を話したうへ、母から何とか申しあげることにした方が、可いかと存じます。』

『然うですか。では然うしますか。』 齋藤も其上强ひて止めやうともしなかつた

『此事については、周造君も强ち感情一遍でも怒つてゐるのでもなささうに思へる。先生には先生の何か根據がありさうにも思へる。で、其の疑點の解けるまで御實家へ行つてゐたいと云ふ御希望なら、私が責任をもつて然うしても可いのです。』

『え、どうぞ……』

そして然うなると、美代子は一刻もこゝに止まつてゐるのが切なくて、旋て身支度に取かゝつた。

母と子

(一)

美代子が都てのことを母の前に懺悔するつもりで、悄々と牛込の家へ歸つて來ると、不斷は絶えて來客のない寂しい玄關の沓脱のうへに、靴が二足揃つてゐるのが目についた。彼女はそれを横目に見ながら、勝手の方の入口から、私と格子戸を開けて入つた。何か事件があるのではないかと云ふ氣がして、何となし不安であつた。

すると古くからゐる女中が出て來て、彼女の姿を見ると、驚いたやうな目をして、彼女を凝視めた。『お客さまは誰方なの。』 美代子は此の女中にさへ氣がおけるやうで遠慮がちに訊いた。自分の家でありながら、自分の歸るべき家でないや

うな氣がしてゐた。

『早瀬さんと河北さんが、珍らしくお揃ひで入らつしやいましたのです。』女中は略事情を知つてゐるらしい表情で、私語くやうに告げた。

『さう。』と、美代子も曇つた顔に、寂しい微笑を浮べた。

で、弟の部屋を覗くと、いつもの通り卓子の上がきちんと形づいてゐて、主はまだ學校から歸つてゐなかつたけれど、これが此家の主人なのだと思ふと、歸つて來た自分が、何だか肩身が狹いやうに思はれた。良人の家を離れた女の身のうへが、如何なに手頼ないものだかと云ふことが、しみ〴〵解るやうに思へた。

『お奥へさう申しませうか。』女中は詰らなさうに、茶の室へ來て坐つた美代子の樣子を見て、機嫌を取るやうに言つた。

『いゝのよ。』美代子は首を掉つて、『御用がすんでからで可いのよ。』

奥からは何うかすると、偶に話聲が洩れて來るが、一體にひつそりしてゐた。

多分河北と姉の藤野との結婚が、何等かの動機によつて母に承認されたのか、或は承認させやうとして、早瀬が彼を連れて來てゐるのだらうと云ふ氣がしたが、事によると早瀬の口から、母も自分の秘密を聞いてゐるやうな感じもした。で、其はそれでも可いと思つた。たゞ藤野の病氣が重つたので、其が今日の會合の原因となつてゐるのではあるまいかとも想像されるので、胸が痛んだ。

怠屈な不安な時が、四十分ばかり續いた。すると軈て客室から三人が出てくる氣勢がしたと思ふと玄關口で別れの挨拶をしてゐるらしく思はれた。

少時してから、玄關へ送りに出てゐた女中がやつて來た。

『お客さまはお歸りになつて？』美代子は訊いた。

『河北さんがお歸りになりました。早瀬さんはまだ在しやいます。私お奥さまのおいでになつてゐることを、御母さまにまで一寸申しあげておきました。』

『さう。』と、美代子はそんなことをしてくれないでも可かつたと云ふ風に、ち

よつと顔を顰めたが、女中が其を氣づいたらしいので、直にまた氣色が緩和して
『可いのよ。』と優しく頷いた。
萬貴子は不意にそこへ姿を現はした。
『弘はまだ歸つて來ませんか。』と、母が其場の氣分を紛らすやうに、女中に訊いた。そして其處に坐つてゐる美代子の萎れた姿を、さも可憐しげに眺めると、
『あゝ、美代子さんなの。』と、聲をかけた。
『は。』と、美代子は向直つて、『どうも暫く。』とお辭儀をして、そつと母の顔色を見た。
『お客さまなんですてね。』美代子は少し間をおいてから言つたが、母は其には應へないで、此場の落着をどこに求めていゝか判らないやうな風であつた。

（二）

美代子は、來たら直ぐ一切を母に打明けるつもりで、可也決心して來た積であ

つたが、母の顔を見ると、急に勇氣が挫けて、やつぱり歸つて來たのが、自分の過ちであるやうに思へた。なぜ良人の侮辱を耐へ忍ばなかつたかと云ふ氣がした齋藤にさへ縋れば、良人と妥協する餘地はまだ十分にあつたやうに思ひ直された結婚當初の決心をむざ〳〵折がれて了つたのが、情なくも思はれた。
『目白でも、皆お變りもありませんか。』萬貴子は訊いたが、別に其の返辭を待つ樣子もなく、美代子が、『は、別に……』と言つて忸怩してゐるのを見て、
『今早瀨さんと河北さんが見えて先刻から色々話があつたのですが其事について實はちよつとお前にも來てもらはうかと思つてゐた處でした。姉さんの病氣のこともう多分お前は薄々知つてゐるだらうと、早瀨さんは言つてゐますけれど……』と、美代子の顔を、初めて眺めた。
『えゝそれは私もちよつと聞きました。』美代子は少し自分の態度を更めた。
『あちらへお出で、色々話もあるから。』萬貴子はさう言つて、別の部屋へ美代

子をつれて行つた。

それは藤野と一緒に、彼女の勉強室にあてゝあつた。八疊で今も美代子の机が一つだけ置いてあつた。藤野が家出をしてからは、母は遺物を見るのの厭だと言つて、姉の物は殘らず板敷の物置部屋へ仕舞込んでしまつた。

美代子は其の部屋へ入るのも、氣が咎めたが、其處から見える築山の木や石を見るにつけても、二人仲よく暮らしてゐた處女時代の純な氣持が、懷かしく憶ひ出されて胸が一杯になつて來た。

萬貴子も何の氣なしにそこへ連れては來たが、同じやうな追憶が老の寂しい胸に沁み出して來て、しばらく口も利けずに、憂愁に沈んでゐた。いとしい娘二人の生涯を、臺なしにして了つたと云ふ悔と悲しみが、激しく彼女の心を打つた。

『姉さんも、聞けば病氣が大分重いやうで、それも自分では諦めてゐるらしいけれど、私も色々の事情をを聞いてみると見殺しにもできないと思つて、實はその

事を美代子さんにも知らして、一度鎌倉へ行かうと思つてゐたところなんですよ美代子さんも、姉さんは可哀さうだとお思ひでせうね。』萬貴子はかう言つて、目を瞬いた。

義代子は長いあひだ張詰めてゐた我慢が、一時に崩れるやうな氣がした。今それを支へる力もなかつた。涙がほろ〳〵と頰を流れた。

二人はしばらく深い沈默に陷ちてゐた。

『過去つたことを、今更言立てたところで爲樣のないことですけれど、そんな事とは御母さんは少しも知らなかつたものですから、今迄は藤野を憎んでゐましたほんとうに詰らない遠慮をしたものだと、あの子の心持を怨めしく、思ひましたけれど、それも美代子さんを思ふからだと思へば、御母さんも何だかすまないことをしたやうで……』

『では、御母さんは何もかも御存じなんですか。』美代子は涙を拭きながら言つ

た。
『え、早瀬さんから殘らず聞きました。』
『では私から何にも申しあげません。』 美代子は蒼白めた顏をしてきつぱり言つた。
『貴女から、この上何にも聞くことはありません。今はそんな事を言つてゐる場合ぢやありません。』

（三）

『姉さんの御病氣でも重つたのぢやないでせうか。』 美代子は氣遣しげに訊いた。
『姉さんも今が今何うと云ふこともなささうですけれど、迚も助かりさうもないと云ふことですよ。』 母は切なげに言つて、涙を袖でおさへた。
美代子はぎよつとした。返辭も出なかつた。胸のうちにごぼりと大きな穴でも

開いたやうな、絶望の悲しみが湧き立つて來た。
『今も河北さんに逢つて、あの人が無くてならないお金の必要に迫られてゐるといふから、藤野にやると思つて、それを今渡したところなんですの。多分河北さんは、そのお金をもつて、すぐ田舍へ立つでせうよ。これからすぐ停車場へ行くやうに言つてゐましたから。』
『お金を御母さんがお出し下さいましたの。』 美代子は感謝の目を睜つた。
『それもなか〳〵少い高ではないのですけれど、藤野の結婚費用や入院費だと思へば、それで濟むのです。早瀬さんと連帶の證書を入れさしてくれと言ふお話でしたけれど、其では御母さんも氣持が惡いから、條件なしに出してやりました。その話もあつたし、藤野の病氣も氣にかゝるから、成らうことなら、貴女を呼びにやつて、一緒に病院へ行かうかと思つてね。』
『え、私も御一緒に行かして戴きたうございます。』

『ですけれど、行くならお家の方へ一寸斷つて置かなければね。』
『いゝえ、可うございますの。』 美代子は先刻から言出さうとしてゐた自分の今日の出來事を、其の時漸と口へ出さうとして、又躊躇した。で、それは姉を見舞つてからでも、ゆつくり話のできることだと思つた。
『私もその積りにはして來ましたの。それに姉さんの病氣は、大槻もよく知つてゐますから。』
『では、ちよつと早瀨さんに逢つては何うです。あの人も行くさうですから。』
『さう?』 美代子はちよつと顏色を變へた。
『あの人は何と言ふか知らないけれど、貴女が厭でさへなければね……』 萬貴子は美代子の樣子を候ふやうに言つた。
『それは介意ひませんけれど……』 美代子は躊躇した。
『それとも貴女の都合で、二人で行つた方が可いやうなら、早瀨さんに今日は歸

つてもらつても介意ひません。』
『いゝえ、それ程にして戴く必要もございませんわ。もう何もかも判つてしまへば、厭な氣持ちも殘りませんから。それに、私事によると、大槻へは歸らないことになるかも知れませんの。』 美代子は言惱んでゐることを、何の苦もなしに口を切つてしまつた。
萬貴子は不安げに、彼女の顏を凝視めたが、この上の問題を想像する餘地もなくて、問ひかへす氣もしなかつた。
『いづれ其の事については、後で詳しくお話しますけれど、そんなこんなで、私御母さんに御心配かけるのが、心苦しくて爲樣がございませんわ。』
『では、貴女の方にも、何か事が起つたとでも言ふのですか。』
『御母さんには、眞實に濟みませんけれど、私あの家に居られなくなりましたの。』 美代子はさう言つて、深い溜息を吐いた。

萬貴子は口も利けなかつた。詳しいことを知るのも煩はしいやうな氣がした。
不思議な沈默が二人の間に續いた。
すると其時、不意に電報が來たと言つて、女中が萬貴子の前へ持つて來た。

（四）

萬貴子が電報を取あげて讀むと、それは鎌倉病院内藤野と云ふ發信者の名の詳しく書込まれたもので。
『ビヨウキキトクアイタイ』と云ふのであつた
萬貴子は絶望的な色を浮べて、無言のまゝ電報を美代子の前に差出した。で、美代子も默つて受取つたが、これも語は出なくて、熱い涙が湧きかへつて來た。
『姉さん駄目なんでせうか。』少間してから美代子は絶望的な聲で言つた。
『樣子が急に變つたものと見えますね。』萬貴子も力なげに呟いて、
『さつき河北さんの話では、今朝逢つて來たと云ふのですが……それもお金が

できると聞いて、遽かに元氣が出て、久振で笑顔を見たと云ふことでしたが、事によるとそれが反つて病氣に障つたのかも知れませんよ。』
『さうね。』
『河北さんは知らないで立つたか知ら。』萬貴子は深い目色をして、『とにかく早瀨さんも來合してゐることですから、直ぐにも行つてみませう。』
『え、ではお伴してよ。』
萬貴子はそれと同時に早瀨の方へ、電報をもつて行つた。
『藤野から電報ですよ。』
『藤野さんから！』早瀨も顏色をかへて、電文を讀んだ。
『容態が變つたと見えますな。心配ですな。』
『其れにちやうど美代子が來てをりますの。』
『美代子さんが……あゝ然うですか。』

『あの子も御一緒に行くさうですが、貴方の御都合は？』
『私？』早瀬は困惑の色を浮べたが、『いゝでせう、美代子さんが介意はないと仰やれば……』
『美代子はもう大槻へは歸らないさうですから。』
早瀬は自分の耳を疑るものゝやうに、じつと萬貴子の顔を凝視めた。
『今貴方、あちらでその話をしてゐるところへ、この電報でせう。私はまだ詳しい事は聞きませんけれど、それは孰れ汽車のなかでゞも聞くとして、早く立つことにしませうぢやありませんか。』
『然うですな。』早瀬も急に緊張した表情で、『しかし其の前に、ちよつと美代子さんにお目にかゝつて御挨拶だけでもしておきたいと思ひますが。』
『然うですね。では爰へ呼びませう。』
萬貴子は急いで、美代子の傍へ反つて來た。そして其の事を告げた。

『どうせ一緒に行くものなら、今のうち行つて逢つたらいゝでせう。』萬貴子は促すやうに言つた。そして支度をしに、あたふた部屋を出て行つた。
暫くすると、美代子は奥の客間へ入つて行つた。あの時別れたきり、二人は妙な意氣張で、ながいあひだ絶えて顔を合したこともなかつた。生涯逢ふ機會があらうとも思はれなかつた。その上美代子には淡い反抗心さへあつた。早瀬には時に憎悪の念さへあつた。その早瀬に何のために逢ふのか、それは美代子にも解らなかつたが、矢張り逢はずにはゐられないやうな氣がした。
『どうも暫く！』美代子は入口の方に坐つて、思ひのほか氣爽に挨拶することができたが、その瞬間彼の目がちらりと此方を見た。彼は其の頃の面影もないかと思ふほど年を取つてゐたが、その目はやつぱり懐しかつた。『やあ。』と早瀬はやゝ狼狽へた風で、『珍らしい人にお目にかゝりますね。その後はお變りもなくて……』

『は、貴方も……』

二人はそれきり目を伏せてしまつた。

（五）

『そして、貴女も鎌倉へ御一緒に？』早瀬は少時してから、目眩さうな目をして、更まつた調子で、しかし至極平凡な語を發した。

『え、お伴したいと思ひますが……』美代子は此の一場の氣分に何だか飽足りないものがあるやうな氣がしたが、其を今の早瀬に求める理由もないのだと思ふと、一層心寂しかつた。

『電報には危篤だとありますね。』と、彼は電報を取上げて、『先刻の河北の話では、當分持つだらうと云ふことでしたが、何うしたのでせうか。』

『は、今も母と話してゐましたのですが、矢張り可けないんでせうかね。』

『何にせい心配ですな。』早瀬は腕組をして、『貴女は初めてのお見舞ひでした

ね。』

『え、ちつとも知りませんでしたの。』と、美代子は微笑を浮べて、『此方へまゐつてゐることすら存じませんでした。』

『それでは一入御心配ですな。』

『貴方は度々お見舞ひ下すつたさうで、その上色々姉のことにつきまして、御骨折下すつたと伺ひましたが、姉も私を怨んでゐたでございませうね。』

『いや、あの人のことですから、人を怨むなんてことはありませんが、然し何うかすると貴女のことは口へ出ました。最近は殊に貴女のことを思つてゐられたやうです。今日お出になつたら、嘸お悦びになるでせう。』

『でも何だか、私は可怕いやうな氣がしてなりませんの。姉の心持が優しいだけに、私一層辛うございますの。』

『その苦痛は、私が幾度となく經驗したことです。でも爲方がありません。因果

應報ですから。』

『私自分の氣持では、然うぢやないのでございますけれど、卒となると臆病になつて、それだけ自分で餘計な苦みをしてゐますの。』

『でも、それで通せるから豪いのです。』

『豪いと云ふのでせうか。』 美代子は空虛な目を睜つて、『傍から見たら、そう見えるかも知れませんのね。』

『好い意味で、羞恥心が強いと言ふのかも知れないね。』 早瀨はさう言つて、笑つた。

『何だか知りませんけれど、その爲に隨分誤解されてゐることもありますの。』

『今御母さんから伺ふと、貴女は是きり大槻へはお歸りにならないんだとか……そんな事のあらう筈はないんですが、事實ですか。』 早瀨は探るやうな目をして、氣輕な調子で訊いた。

『何ですか、まだ分明さうと極つた譯でもございませんけれど、多分然うなるだらうと思ひます。』 美代子は指環の寶石を弄りながら、伏目がちに應へた。

そして少し間をおいてから、『それも別に深い理由はございませんので。』

『でも何か動機はあるでせう。』

『え、それは多少……』

『まさか貴女は自分から矜を傷つけるやうなことは、口にしなかつたでせうね。』

『え、それは……』 美代子は直ぐ其の意味を讀んだが、『そんな事ではなかつたんですの。もう極つまらない……』

『然うですか。』 早瀨は頷いたが、

『しかし動機は孰にあるんですか。』

『つまりお互に詰まらなくなつたんでせうね。』 美代子は暗い表情をして、『それに大槻は私を自分の所有にしやうとしますけれど、その慾望が充されないといふ

不滿がございましたから……』

『さうですか。』早瀬はまた頷いたが、『私の聞くところでは、甚く仲がいゝと云ふことでしたが……』

急に衣摺の音が、廊縁の方に聞えた。萬貴子が來たのである。

再會

(一)

その間に、萬貴子が女中に吩付けておいた自動車がやつて來たので、三人はやがて打連れて家を出た。

自動車のなかでは、萬貴子と美代子が並んで、早瀬がそれに向ひ合つてゐたが、母がゐるので若い二人はたゞ時々視線が合ふだけで先刻の續きを話すことも出來なかつた。

『ふとすると、河北君は何にも知らずに立つたかも知れませんね。』早瀬は萬貴子に話しかけた。

『然うかも知れませんね。』萬貴子は苦い顏をしてゐたが、『あの人もまさか藤野が、こんな病氣を出さうとも思はなかつたでせうに……今となつては河北さんが、一番氣の毒ですよ。』

早瀬は何だか擽つたいやうな氣がした。彼とても肋膜を患つたくらゐの藤野が、健康體をもつてゐるとは思はなかつたが、其の爲に結婚を忌避したと思はれるのは、迷惑であつた。

『藤野さんに肺病が出ると云ふことは、誰にしても考へても見なかつたことですからね。』早瀬は遠廻しに辯解するやうに言つた。

『お醫者にだつて、解らなかつたことですもの。』美代子も口を添へた。

『さうだともね。何もかも、私には案外なことばかりでね。』萬貴子はやつぱり

苦い表情をして言つた。
『私に言はせれば、一體お前たちが可けないのですよ。姉さんの好意を無にしたと云ふのが、お前たちの過です。美代子さんが、些とでも其の事を私の耳へ入れてくれれば可かつたのです。濟んだことは爲方がないけれど、私はそれを怨みますよ。』
『それも色々考へてみたのですがあの時は何うしても然ういふ氣にはなり得なかつたのです。』 早瀨は美代子の立場を劬はるやうな氣持で言つた。
『それも私が惡かつたんですの。』 美代子も萎れた聲で言つた。
三人は多くを言はなかつた。そして自動車が東京驛に着くと間もなく横須賀行を出たので、急いでそれに乘つた。空には白雲が浮いて、もう秋風が吹いてゐたが、汽車のなかはまだなか〳〵蒸暑かつた。萬貴子は藤野が家出をしてから今日まで、何ういふ風にして暮してゐたかを時々早瀨に訊いた。

『では貴方は藤野が田舍にゐた時から、始終交際つて下すつたのですね。』
『絶えず目は放さないやうにしてゐた積です。』 早瀨は應へた。『それて病氣になりになつてから、一度其の事を貴女にお話しやうと思つたのですが、その場合には藤野さんに對する貴女の誤解からして釋かなければならない。それには美代子さんのお考へも訊かなければならないといふ譯で、氣にかゝりながらつい延引になつてしまつて實に申譯がないのです。』
『ぢや美代子さんは、姉さんの病氣については、今日まで何にも知らなかつたのですね。』 萬貴子は片傍に座席を占めてゐる美代子に語をかけた。
『え、私ちよつとも……』と、美代子は先刻から姉に會見する時が、愈々近づくのだと思ふと、何だか懷かしいやうな可恐しいやうな氣がして、其事ばかり考へてゐたのであつたが、ふと我に復つたやうに應へた。
『何うして又姉さんの病氣してゐることがわかりました？』

然し美代子はそれを話す段になると、可成複雑した氣分の紛糾があるので、些と手輕に話せないと云つた風で、躊躇してゐた。

（二）

『それには不思議なことがあるのです。』萬貴子の左側に坐つてゐた早瀨が言つたが、此處で咲子のことなどを言出して、二重にも三重にも萬貴子の頭腦を紛糾かせるのは、彼に取つても可也煩雑であつた。

『しかし其事は追々にお話しすることにしませう。』早瀨はさう言つて口を噤んだ。

鎌倉へ着いたのは、もう日の暮方であつたが、一たびその海岸の古い町の空氣に觸れると、三人の氣持は一樣に、危篤に陷つてゐる藤野の身の上に集つて、車に乘つてゐる間も顏が深い不安の色に封されてゐた。秋近い海岸には、避暑客や海水浴帽の影も見えないで、森のなかに蜩の聲が侘しげに聞えてゐた。

電氣のつく頃の病院は、何の室も閒寂してゐたが、早瀨の先立で、ずつと奥の方にある階上の藤野の病室ちかくへ、間もなく彼等は氣遣しげな足を運んで行つた。

『一度に多勢入つて、患者を興奮させても惡いのですから樣子を見に私だけ入ることにしませう。』早瀨は廊下の曲り角で、二人を振顧つてさう言つた。

『さうね。』美代子は暗い表情をして、『では此處に待つてゐますわ。』

すると其處へ見知りの醫員が一人通りかゝつたので、早瀨は窃と其の側へ寄つて、帽子を取つた。

『今日の容態は如何でせうか。』

醫員は彼と少し離れて美代子たちの姿を見比べてゐたが、嚴肅な調子で、

『今朝御主人が見えてから間もなく、急に樣子が變つて、脈搏といひ呼吸といひ、ちよつと不安に思はれましたから、看護婦と相談して、御主人はじめ貴方のとこ

ろへ電報を打つたら如何かと言つておきましたが、御本人も何だかそんな氣がしたとみえて、甚く貴方がたの來られるのを待たれたやうです。其から御母さんにも一度逢ひたいといふ御希望だつたさうですが、その方も見えましたか。』

『は、みんな遣つて來ました。併し多勢顏を出しては如何でせうか。』

『さう！』醫師は首を傾げたが、

『介意はんでせう。……それに三時頃から又持直して來ましたから此分なら今が今何うと云ふこともないでせう。けど何分浮腫も來てゐますし、呼吸がひどく切迫してゐますから、此上はたゞ心臟が問題なのです。何なら貴方一人で、樣子を御覽になつた方が可いかも知れません。』

で、早瀨はまた其事を美代子たちに話した。

『當分持つさうです。』彼は二人に私語いた。

二人は吻とした樣な顏をした。

早瀨はドアを開けて、私と病室へ入つて行いた。病室にはもう明がついてゐたが、看護婦が心配さうに瘦せ細つた彼女の手につかまつて、脈搏を見てゐた。そうして早瀨が顏を覗き込むと、『今おやすみになつた處です』と、看護婦は微聲に私語いた。

暫く來ない間に、總ての樣子が著しく變つてゐるのに、早瀨は氣がついた。彼は河北がせつせと來てやることになつてから、以前ほど繁々足を運ぶやうなこともなかつた。でも、最近に見舞つてから、二週間にもなつてゐなかつた。

早瀨は息を殺すやうにして、少時窶れほそつた彼女の顏を眺めてゐたが、小鼻の骨張つたことや、顏の小くなつたことなどが、著しく彼の目を駭かせた。

寢てゐるうちにと思つて、間もなく早瀨は外に立つてゐた二人を誘ひ入れたがそれと同時に患者は病み疲れた目をさまして、細い溜息をついた。

藤野の頭腦は、體がそんなに成つてゐても可也明晰してゐると見えて、美代子と萬貴子が、早瀬の通知でベッドの傍へ寄つて來るのを見ると、苦惱のなかにも喜悅の色が隱せなかつた。

『御母さんと美代子さんです。』 早瀬は微聲で言つた。

藤野は『えゝ知つてゐます！』といふ風で、目で頷いて、淋しい微笑を洩らしたが、涙が一杯に湧溢れて來た。

『姉さん、眞實に濟みませんでしたね。』 美代子が胸が一杯になつて涙聲で言つて、我を忘れて藤野の手に縋つた。『姉さんがこんなになつてゐらつしやることは、私夢にも知りませんでした。それも皆な私が片意地だつたからなんです。堪忍して下さいね。』

藤野は痛々しげに痩せた肩までわな〳〵顫へて、術なげに飲泣げた。同時に美代子も身を顫はして、泣出した。長く堰止められてゐた深い友愛の情が、一時に湧返つて來たのであつた。そしてそれを見た早瀬も萬貴子も、同じやうに目を伏せて、ぽろ〳〵と涙を流してゐた。

沈默がしばらく續いた。

『藤野さん、暫らくでしたね。』 萬貴子は大分たつてから、美代子が離れた處を見て、傍へ寄つて優しい言をかけた。

『御母さんも美代子さんも、よく來て下さいましたね。』 藤野も漸といくらか落着いて、明晰した聲で言つた。

『かうと知つたら、今まで放拋つておくのではなかつたのですがね、此頃になつて早瀬さんからお話を伺つて、何もかも判りました。藤野さんの心持も能うく解りました。』 萬貴子はさう云つて、手巾で涙を拭いてやりながら。『もう恁うなる以上は、何にも心配することはありませんよ。河北さんにもお金を御用達しておきましたからね。もう安心して、氣永に養生して、丈夫になつて下さいよ、ね。』

藤野は嫣然した。
『有難うございます。私きつと癒ります。』
沈默がまた少し續いた。
『早瀨さん。』藤野が呼んだ。そして早瀨が顏を出すと、『河北はもう立つたでせうか。』と、喘ぐやうな聲で聞いた。
『立つた筈です。しかし一兩日うちには歸つて來るでせう。』早瀨は笑顏を作つて、『それに總てが都合よく運んだので、この上は貴女が一日も早く丈夫にならなければ可けません。』
『有難う。貴方には是迄色々お世話になりましたね。』
『そんな事があるものですか。病人がそんな事を考へては可けません。私はたゞ私の氣持だけのことをしてゐるに過ぎないのですから。』
藤野は頷いた。

『美代子さん、あなた顏を見せて頂戴な。』藤野はまた窓際に立つて泣いてゐる美代子に聲をかけた。
美代子は涙を拭きながら、急いで傍へ寄つて行つた。
『姉さん、私ね、今迄御無沙汰したかはりに、明朝からは毎日お見舞に來ますわ。』
『え、でも貴女だつて御主人があるんですものね。』藤野は淋しく笑つた。
『そんな事は何うでも可いのよ。』美代子も苦笑した。
『わたし美代子さんの旦那さまにも、そのうちお目にかゝれて？』
『え。』と、美代子は不用意に頷いたが、この場合それ以上言ふ氣もしなかつた。
藤野もそれ以上話をするのが、大儀らしかつたので、一同も餘り聲を立てないことにした。

海岸

（一）

その晩はそれで何のこともなかつたが、いつ變調が來るかわからないと云ふので、萬貴子だけは病室に殘つたが、若い同士二人は近所で宿を取るか、早瀬だけは一旦歸るかすることにして病院を出た。

幽鬱な病院を出た二人は、暫くすると、何となし海岸の方へ出て行つた。空には白い綿のやうな雲が散亂して、月はなかつたけれど、星が煌々光つてゐたので、そのまゝ宿へ行くのも惜しいやうな氣もしたし、別れるのは尙餘足りないやうに思はれた。それに死に瀕してゐる病人の傍に長くゐて、頭腦が締めつけられたやうになつてゐたので、高い空でも仰ぐか、廣い海でも見るかしないではゐられなかつた。

『さあ何うしたものかな。』早瀬はその途中ふと立停つて呟いた。二人一緒に出は出たが、一つの宿を取るのも可笑しい、それかと言つて、別れて宿を取るのは尙可笑しいやうな氣がした。東京には用事もあつたけれど、藤野の容體を考へると當分病院の傍を離れるのも氣懸りであつた。

『何を考へてらしやるの。』美代子も足を止めて、先刻牛込の家で逢つた時から見ると、ずつと心安けな調子で訊いたが、それでも何だか空虛のやうな感じがしした。

美代子は今し方姉を久振で見た時、その場の發作的の感情で、心から悲しみ泣いたのであつたが、現場を離れて見ると、それが何だか別箇の自分の感じたり爲たりしたことのやうにも思へて、自分の眞實が疑はれた。それに場合が場合だから、爲方がなかつたやうなものの、周章て早瀬と一緒にあの病室へ顏を出したのも、今考へると、餘りに思慮を缺いた仕事のやうに思はれた。

『やつぱり私は來なかつた方がよかつた！』美代子は然う云ふやうな氣もしてゐた。

『美代子さんは何うしますか。』早瀨は美代子の問ひに答へるかはりに、然ういつて訊いた。そして星明にも見える惱しげな彼女の顏を凝視めた。

『私？　何うして？』美代子は疑惑に充ちた目をして反問した。

『姉さんが死ぬか生きるかといふ場合に、我々は一緒に宿を取つても可いですか。』

『可けなくて？』

『可けなくはないかも知らんが。貴女の心持を訊くのです。』

『それは私も、姉さんに濟まないやうな氣はするの。だけれど姉さんは、そんな事を氣にかけてゐないでせう。』

『いや、姉さんの所思よりかも我々の氣持ですよ。』

『それは餘まり氣持がいゝこともないかも知れないけれど、お互に信じあつてゐさへすれば、それで可いことぢやなくて？』

『それは然うに違ひない。貴女さへ介意はなければ、僕は何うでも可いんです。』

『けど姉さんは何と思つたでせうね。』

『死に瀕してゐる人ですもの、そんな問題なんか考へてゐないでせう。』早瀨は笑つたが、『然し恁ういふことだけは言へるかも知れませんよ。』

『えゝ。』と、美代子は好奇の目を睜つた。

『美代子さんと僕とが、御母さんと一緒に行つたのは、藤野さんに取つては、意外であつたに違ひない。』

『何うしてゞせう。』

『病氣になつてからは、餘りそんな話も出ないけれど、あの當時は僕と美代子さんと結婚しなかつたことについて、別に甚く不滿に思つてゐる樣子もなかつたや

うだから。』

『さう！』美代子は長く引張つた口調で應へた。

（二）

『では貴方は、まだ眞實のことを姉さんにお話しなさらないの？』美代子は不思議さうに訊いて、『姉さんの疑ひが、全く事實に違ひないと云ふことをだわ。』

『いや別に……そんなことを說明する必要もないほど、姉さんはそれを信じてゐたんだから。だから河北と結婚もしたのでせう。』早瀨は美代子が何故今更そんなことを訊くかと云ふ調子で答へた。

『だつて姉さんの感じたことは、眞の抽象的のことだわ。姉さんだつて、私達のことに就いて、もつと深いことを知りたいと思つたはずですわ。』

『それは然うかも知れない。しかし、あの人に取つては、そこまで詮索する必要はなかつたのです。私達二人の結婚するのを傍で見るのが、あの人には何となく

嬉しく思はれたと同時に、自分が犧牲的結婚をしたことについて、何かしら好い氣持がしたに違ひないのです。無論それには相當の惱みもあつたに違ひない。然うするのが、妹の貴女に對する正當な姉の愛で、又務めだと思つてもゐたでせう。けれど、所詮はそれだけのことです。藤野さんの結婚生活が幸福であつた場合を想像してごらんなさい、問題は極めて簡短なんです。』早瀨は慰めるやうに言つた。

『だけど、私達に取つては、さう簡短な問題ぢやなかつたんですわ。』美代子はその時のことが想像されると云ふ風で、『姉さんだつて、私達の關係が餘程深くなつてゐるといふことを虞れて、自身あゝ云ふ風に處決したに違ひないんですからね、貴女はさうは思はない。』

『私もあの時は、何もかも見透されたやうに感じたのです。そして正直に事實を告白しやうと考へたのです。けれど、其後度々……殊に病氣になつてからは、

何もかも打明けて、昔しよりも遒かに深い親しみが加はつて來たに拘らず、あの人は、私たちがなぜ結婚しなかつたかと云ふことなどは、深く問題にしてゐないのですからね。』

『貴方が誰の有でもないといふことが、結婚後の姉の喜悅でゞもあつたのでせうか。』

『格別喜悅でもなかつたでせうが、然しまた悲しみでもなかつたに違ひないのです。その證據には、姉さんは刻先貴女の顏を見るなり貴女の良人としての大槻さんに、思ひのほか敬意を表してゐましたからね。』

『え、さうよ。』と、美代子も同感を禁じ得ないと云ふ表情で、『それが何だか、私には飽足りなかつたの。』

『無論あんな場合には、誰しも感傷的になりがちなものです。貴女さへ、聲をたてゝ泣いたくらゐですからね。』

『それあ私だつて、可哀さうだと思つたわ。』

『僕にしたつて、あの人の不幸な短い生涯を悲しまない譯には行かないのですからね。』

『それは、あんな病氣に罹つたといふことだけでも、十分同情ができるのですからね。』美代子も聲に應じて言つたが、『でも貴方は、これ迄絶えず姉を見舞つて、御自分の罪の償ひをなすつたのね。姉もそれは滿足してゐるに違ひないのですわ。あなたの愛が、やつぱり自分にあつたのだと思つて、悅んだに違ひないのですわ。私にも、それだけは想像できないことはないの。』美代子は物悲しげな語調で、彼の答へを促すやうに言つた。

『それは然うかも知れません。』早瀨もそれを拒まなかつた。

『だから、その點からいへば、姉は私より如何に幸福だつたか知れませんね。私のやうに、始終孤獨ではなかつたのですからね。』

（三）

『貴女が孤獨だつたと云ふのですか。』 早瀨は詰るやうに訊いた。

『それも私の擇んだ道なんですから、爲方がないわ。』 美代子は我と冷笑ふやうに言つて、『私は自分の幸福にしやうと思つて、結婚なんかしたのぢやなかつたんですもの。結婚と同時に、生涯の幸福は惜氣もなく棄てゝしまつたのですもの。』

『けど、私の聞いた所では、貴女方の家庭は可也幸福だと云ふぢやありませんか。』

『多分貴方は三崎さんからお聞きになつたんだらうと思ひますけれど、あの人などに私達の内面が解るはずがないんです。』

『三崎は貴方のことを大變賞めてゐました。貴女と會見した事を、非常に名譽としてゐました。』

『然う！』と、美代子は恍けたやうな調子で、『大變な名譽もあつたものね。私の何處がそんなに氣に入つたんでせう。それに三崎さんの御母さまは、私たちの父の先妻だつたんですもの。』

『さあ、それがさ。』 と、早瀨も思ひ出したやうに、『僕もそのことは、あの女の家にゐる時から感づいてゐたんですが、所詮は藤野さんとも姉妹關係だといふことです。尤も咲子があの御母さんの娘だといふことについて、大分疑はしい點もありますがね。』

『ぢや眞實の娘ぢやないんですの？』 美代子は訝しみの目を丸くしたが、『それなら別に可笑くもないわね、あの人が貴方と戀愛關係があつたところで――。私さういふ風に想像してゐました。この想像は多分中つてゐるだらうと思ひますわ。』

『いゝえ、それは貴女にも似合はない淺果敢な想像です。あの女が大槻君の戀人であつたことは僕にだつて初めから解つてゐたんですから。』 早瀨は熱心に辯解

して『だが、この頃のあの女の消息を、貴女は知つてゐますか。』

『いゝえ。何うして？』

『あの女のことについて多少問題もあるので、私も其事については骨を折らうとは思つてゐるのですが、それも其きりで近頃さつぱり遣つて來ませんから、實は何うしたかと思つて……』

『問題つて如何な事？』

『それもあの女が、貴女に會見してから、急に觸れて來た問題なんです。つまり今迄の不眞面目な、顏を賣物にしてゐるやうな生活から脫れやうと云ふ事なんです。』

『そんな事は、私は知りませんけれど、大槻があの人に、この頃問題の一萬圓を指供したはずですわ。』

『一萬圓を？へえ！』と、早瀨は思はず驚異の聲を立てた。

『貴方は其事について、何かお聞きになつたことはございませんの。』

『いゝえ、ちつとも。』

『して見ると、あの一萬圓は何うなつたんでせう。』

『さあ、それが薩張解らないね。』　早瀨も首を傾げた『して一旦拒んだ大槻君が何うして今になつて其の金を提供したでせう。』

『私に對する復讐よ。』　美代子は冷笑するやうに言つた。

『何か復讐される理由でもあるんですか。』

『貴方と咲子さんのことについて、私があの男を少しばかり挑發したのが近因なんですけれど、結婚以來長いあひだの私の態度が、あの人に此頃漸く解りかけて來たからなんですの。姉と私との間が、久しく絶えてゐたと云ふ、其の原因が姉妹で戀を競爭した結果だと云ふんですの。』

（四）

早瀬は驚くよりも、寧ろ戦慄した。戦慄したと云ふよりも、痛快を感じた。

『大槻君が、それを感づいたんですか。』

『然うなの。』美代子は萎れた聲で言つた。

『實に痛快ですね。』

『私が復讐されたことが、それほど貴方に痛快なんですか。』美代子は口惜しげに反問した。

『いや、誤解しては困ります。大槻君の推察其事が、單に痛快だと言ふに過ぎないのです。貴女にだつて、痛快でないことはない筈です。それは實際然うです。』早瀬は一人で確めた。

『それあ然うかも知れないわ。私は今日の運命を豫期し乍ら、わざと人と自分を欺いてゐたかも知れないんですわ。』美代子は興奮の語調を帶びて、『私が結婚以前の生活について、眞の少しばかり話したとき大槻の狂氣じみた腹立は、まあ如何なでしたらう。そして其の結果、あの男は一萬圓と云ふ株券を、金庫から掴み出して、家を飛出してしまつたんですのよ。其こそ眞實に痛快だつたわ。』

『でも貴女は、その時泣いたに違ひないと思ふ。先刻姉さんの顏を見て泣いたやうに。』早瀬は相手の顏を星影に覗きこんで、揶揄ふやうに言つた。『私の想像は中つてゐるでせう。』

『泣いたつて可いわ。』美代子は慍つたやうな笑つたやうな表情を見せた。『誰のために、私が泣いたか、貴方だつて知つてゐる癖に！』

『そんな事は何うでも可いとして貴女が大槻へ歸らないとか云ふのは、眞實ですか。』

『明白したことは私にも判りませんの。だけれど、多分さうなるだらうと思ひますわ。』

二人は松原蔭の砂地を、ぶらぶらと歩きながら、夫から夫へと、話が盡きなか

つた。空には砂を撒いたやうに星の群が光を增してゐた。夜露がしと〳〵と二人の袖袂を潤して、海岸の秋の夜が大分更けてゐた。

彼等は話し疲れてか、それとも其れ以上口では言現せない情緒の絡りがあつたためか、暫くは深い沈默に耽りつゝ、しつとり濡れた砂を踏んで、ぶら〳〵歩いてゐた。氣がついてみると、彼等は何時とはなしに、手と手と相觸れるくらゐの距離にゐた。波の音さへ耳に入らなかつたほど、二人は話に夢中になつてゐた。

『何だかひどく長話をしてしまつたやうだ。』 早瀨は大分たつてから溜息を吐くやうに言つた。

『え、さうね。』 と、美代子も漸と氣がついたやうに、『宿へ若しかすると、電話でもかゝつてゐたら大變よ。』

宿は早瀨が藤野を見舞ひに來て遲くなつた時などに、時々泊つた處であつたが今夜も美代子をそこへ泊らせることにしておいて、萬貴子と別れたのであつた。

そこは病院から僅か五六町の距離にあつた。で、一人或は二人行くからと、電話をかけておいたので、部屋はちやんと用意してあつた。

で、早瀨はそこへ美代子を送込んでおいて、其晩は一旦東京へ歸るつもりもあつたのだが、夜も可也更けて體も疲れてゐたし、話もまだ殘つてゐるやうな氣がしたので、右に左空腹を癒やすために、食物を取ることにした。

『何でも可いから、早くもつて來てくれ。』 早瀨は女中にさう言つて促して、洋服をぬいで湯に入つた。

彼等は三年振で東京を離れたところで互に打釋けた話をすることが出來たのであつた。二人は同じ藤野の病氣を小田原に見舞つた歸りに、函嶺や國府津で秘密に會合したことが二度も三度もあつた。

死

（一）

夜が遅かつたので、翌朝二人の目がさめたのも可也遅かつた。冷々した海風が青蚊帳をそよ〳〵と煽つて、松原からは蟬の聲が聞えてゐた。日が闌けてゐることに氣がつくと、二人は言合したやうに、一緒に臥床を離れたが、それと同時にその一夜の病院の樣子が如何なであつたかゞ、先づ強く彼等の頭腦を刺戟した。

二人は蚊帳をくゞつて、急いで廊下へ出てみた。

『もう悉皆秋だね。』早瀨は籐椅子に腰を卸して松原をこえて紺碧の色をたゞえてゐる、靜かな海を見遣りながら、咏嘆するやうに呟やいた。

『何だか寂しいわね。』美代子もまだ眠り足りないやうな目を睜つて物悲しげに呟いた。

時計を見ると、八時少し過ぎてゐた。

『藤野さんは昨夜も無事だつたらしいね。』

『さうね、あれで案外持つかも知れないわ。』美代子は自ら慰めるやうに答へたが、死に瀨してゐる姉の病床を考へるのも、親しみがなかつた。今迄もまだ心のどこかに殘されてゐたやうな、處女時代の姉妹らしい氣持が、迹型もなく消えて了つたやうに思へた。

『貴方はすぐ病院へ行く？』暫らくしてから、美代子は訊いた。

『行かない譯には行くまい。』早瀨は淋しい微笑を浮べた。

『美代子さんは？』

『私？　さうね！』美代子は嫣然したが、『私だつて行くわ。』

『平氣で行ける？』早瀨は揶揄ふやうに言つた。

『平氣ぢやないわ。だつて爲方がないぢやありませんか。』

『二人顔をそろへて行つたら、藤野さんだつて好い氣持がしないに決つてゐるんだからね。』

『それも然うかも知れないけれど別々に行けば尙變だわ。』

『どこまでも美代子式だな。』 早瀨はまた淋しく笑つた。

女中が上つて來たところで、彼等は名々下へ淨手をつかひに降りて行つた。そして再び上つて來たときには、部屋が綺麗に片着いてゐた。

『すぐ御飯にして頂戴な。』 美代子は鏡臺の前で、髪を結んでゐながら、女中に吩咐けた。

『畏まりました。』 女中はさう言つて、部屋を出て行つた。

早瀨は餉臺の上で、今朝の新聞を見ながら、靜かに朝茶を啜つてゐた。

美代子の身じまひができる頃に女中がお膳を運んで來た。で、二人は差向ひで箸を執つた。

すると其時女中があわたゞしく上つて來て、今病院から電話がかゝつたと知らした。

二人は思はず顔を見合した。

直に箸をおいて、早瀨がおりて行つた。美代子は別に驚きもしなかつたが、御飯を食べてゐる氣もしなかつた。で、直ぐに出て行くつもりで着替に取かゝるとそこへ早瀨が歸つて來た。

『切迫したらしいね。すぐ行かう。』 早瀨は嚴肅な表情で言つた。そして急いで洋服に着替へた。

間もなく二人は揃つて宿を出て行つた。

『まだ大丈夫でせうか。』 美代子は不安さうに訊いたが、その氣持は自分にも解らなかつた。』

（二）

病院へ行くと、母の萬貴子がちやうど廊下に待受けてゐて、二人の姿を見るといきなり傍へ寄つて來た。彼女の顔は一夜の疲勞と憂慮に充ちてゐた。

『今朝明方から容態が變つて、大變苦しさうでしたが、注射でもたして、今のところは落着いてゐますけれど、もう迚も駄目だらうと云ふのでね。此上苦しませるのも可哀さうだから切望樂に息を引取らせたいものだと思つてね。』萬貴子はさう云つて、充血した目に涙を入染せてゐた。

二人は思はず首を俛れた。

『それから三崎母子に一目逢ひたいから、電報を打つてくれと、今朝早くそんな事を言つてゐましたがね、一寸私一人の考へにもいかないから早瀨さんに訊いてからにしやうと思つてね。』

早瀨は『さあ！』と云つて首を捻つたが、同時に美代子も顔を曇らせた。あの血の冷い蝶子が死の間際に顔を持つて來やうとは思はなかつた。大槻がもつて行

つたはずの一萬圓さへ、途中で消えたくらゐだから、咲子が如何に神經が鈍くても、ぬけ〳〵遣つて來られる理由がないであらうと思はれた。それに二人とも、此際咲子母子に逢ふのは厭であつた。

『呼ばない方が可いわ。』美代子が言つた。

『呼んでも來る氣遣がないんですから。』早瀨も餘り進まないと云ふ顔色であつた。

で、其事は自然に消滅して了つた。

『それからお前たちは、病室へ入るなら一緒に揃つて入らない方がいゝかも知れませんよ。』萬貴子は諭すやうに微聲で言つた。

美代子は早瀨と顔を見合した。

『何うして。』

『病人が氣にするからさ！』萬貴子は仰山らしく眉を顰めた。

美代子は驚きの目を睜つた。
『昨夜も夜中に、急にその事を氣に爲出して、二人揃つて何處へ行つたのか、早く搜して來てくれと云つて、大變神經が昂ぶつて來ましてね。』萬貴子は一層聲を低くして言つた。
美代子は思はず戰慄したが、早瀨も顏が蒼くなつた。
『だけど其は如何な意味でせう。』と、美代子は獨語のやうに呟いた。
萬貴子はそれには應へないで、更に暗い目をして、『それから美代子さんは、何故大槻さんと一緒に來ないで、早瀨さんなんかと連立つて來るんだらうなんて、そんな事もひどく氣にかけてゐる樣子ですからね。』と、私語いた。
二人はまた顏を見合した。
『それぢや私もう姉さんに逢はない方が可いでせうか。』美代子は嘆息するやうに言つた。

『けど、顏を出さなけあ出さないで、やつぱり氣にしますからね。』萬貴子は當惑したやうに、
『それに其處は私が巧く言つておきましたから……まあ、早瀨さんだけ切めにお入りになつて、それから好い時分に、美代子さんが來るといふことにでもしたら。』
『けど、そんな事をするよりか、矢張一緒に入つた方が可くはないですか。』早瀨は色を正して言つた。
『そして場合によつては、美代子さんが大槻さんを出たことも話した方が可さうに思はれます。今死んで行く人を欺くのは、可哀さうです。情に於て忍びません。』
美代子は思はず、肅然となつたが、萬貴子もそれを拒む氣はしなかつた。
『皆さん入らして下さい。お早く、お早く……』看護婦が廊下へ駈出して來て

微聲で、然し銷魂しく呼んだので、三人は一齊に病室の方へと急いだ。同時に醫師も駈つけて來た。

暫くの間に、藤野の容態はすつかり危險に陷ちてゐた。

『姉さん！　私よ、美代子よ。』　美代子はさう云つて、姉の手に縋つた。

『藤野さん、僕……早瀨もこゝにゐます。』　彼もさう言つて手を執つた。

藤野はもう口も利けなかつた。目も見えなかつた。けど聲は聞えたと見えて、苦しげに喘ぎ〳〵口元に微笑の影をたゝへて、二人の手を自分の胸のうへで聢り握らせて、ほろ〳〵と涙を流した。

三人の泣すゝる聲を後にして、藤野は間もなく最後の息を引取つた。

妹思ひ（たばり）

大正九年六月十日印刷
大正九年六月十八日發行

（定價金貳圓參拾錢）

著作者　徳田秋聲

發行者　東京市本郷區弓町一ノ廿五　茅原茂

發行所　東京市本郷區弓町一ノ廿五　日本評論社出版部　電話小石川一九七一　振替東京九六七八

印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八　株式會社博文館印刷所

（印刷者）　荻原勝次郎

妹思ひ　附奥

日本評論社刊行圖書目錄

——配列は發行順に依る——

本社刊行書は全國著名書店に於て發賣し居るも舊版のものは品切れとなり居るやも計られず、斯る場合は直接本社へ御註文相成らば即時御送本申上ぐべく候、御注文の際は成るべく振替か御利用下さる方相互の便宜に御座候。振替東京九六七八番

茅原華山著

國民的悲劇の發生

菊大判五百頁
定價金貳圓
送料金十二錢

六版

著者曰く「涙を揮つて國民生活の現實を曝露して民生維新を高調し更に進んで民主卽專制の理想を宣明したるものは此書なり」と。

小倉徂峯著
經濟諸大學批判

資本家と重役並に被使用人階級の新福音 三益主義

四六判二百餘頁
定價金六拾五錢
送料金四錢

七版

資本家は爲めに重役雇傭者勞働者の總能率を增大し得て利潤の程度範圍を擴大するのみならず三階級共に感情的總和を發露し得て動搖不安を一掃するが故に勞働問題解決の一方法としても是非一讀を要す。

秋田雨雀
仲木貞一共著

戀の哀史 須磨子の一生

四六判箱入美裝
定價金壹圓四十錢
送料金拾錢

十五版

大正に近松あらばとことばにうつくしく劇に生きむ君かも

「實に美しい最後だ、英雄的だ！」と小村欣一侯をして三嘆せしめたる彼女の詩的全傳は是れ、その戀と血と涙に彩られたる空前の哀史、空前の情史!!

安成二郎著
竹久夢二裝畫

戀の繪卷

四六判箱入美裝
定價金壹圓五十錢
送料內地十錢

四版

紫雲靉靆たる春の日に、月光朧々たる春の夜に、此の一卷を繙かば紅意綠情恍として艶殺されん。口繪に掲げた四十名の女性を讃美し本文には著者特有の戀愛、觀女性觀を收め寫眞と歌と文と加ふるに夢二氏の艶麗なる裝畫と相俟ちて全卷正に戀の樂園!!

室伏高信著

デモクラシー講話

四六判箱入上製
定價金壹圓三十錢
送料金八錢

八版

流行語としてのデモクラシーを知る者は多し、而も世界改造の基調としてのデモクラシーを心會味到せる者果して幾人ぞ！ 我が現代に於ける新進花形の思想家にして特にデモクラシーの專攻者として著明なる室伏氏の精悍なるデモクラシーの雄叫びの聲を聞け!!

森律子孃著
竹久夢二裝畫

妾の自白

四六判上製箱入
定價金壹圓五拾錢
送料金拾錢

三版

帝劇女優中での花形女優森律子孃が僞らざる告白！ その內容の一班を示すならばその一が揚幕の蔭より、その二が赤阪より、その三が交机に倚りて、その四が同じ脚光の中に、その五が鏡臺の前の思ひ出、その六が拔萃帳より。口繪には律子最近の肖像を始め是れ迄の扮役全部をコロタイプ版にして四十八枚！

山川菊榮著

婦人の勝利

四六判上製箱入
定價金壹圓三十錢
送料金八錢

三版

女史、近來筆鋒愈々鋭く、觸るゝ所悉く、燃燒し盡さずんば已まざるの意氣あり、本書は、筆を原始時代の男女關係に起し、系統を追ひ進んで近代の婦人運動職業問題に及びたるもの、苟も現代の婦人問題を研究せんとせば、唯一人たる女史の本書を外にして他に何物があらう！

茅原華山
小田政賀共著

現代文章講話 ―新しい文章は此の呼吸で書け―

四六判上製
定價金壹圓卅錢
送料金八錢

三版

今や言論に於て文章に於て、日本の弱點は悉く世界の巷に暴露されたり。若し青年諸君にして心臟を連れて現代文化の爲めに戰はんとせば在來の日本文章の奧底に横ほれる眠と死との盤根を除去せざるべからず。玆に華山先生深刻に考慮する所ありこの著をなす。讀むべき也。

金子洋文著

勞働美談 力の勝利

新型ポケット判 定價金七十五錢 送料金四錢

廿五版

何人をも感泣勤勉せしめねば已まぬ好讀本！本書の内容は男女勞働者並びに會社商店の使用人が勤勉立志の最近實話を誰にも面白く判じ易きやう小說風に綴れるもの、近來にない面白くて有益な本です。

法學博士 田尻稻次郎氏序
法學博士 井上友一氏序
木下幹著

三六判並製 定價金七十五錢 送料金四錢

主婦必讀 婦人も働け

再版

如何にして將に變來せんとする大生活難の時代に備へんとする乎、「國民總勞働」を提唱せる本社は茲に本書を提供して、婦人の經濟的覺醒を熱求す。都鄙を通じて新しき婦人職業を數百種懇切に說示し餘蘊なし。

青山供平著

株は此の呼吸で行け

四六判皮表裝圖 定價金參 送料金十三錢

四版

本書は其題言の示せる如く專ら中外商業新報の株相場の綾と駆引の呼吸とを詳しく併せて戰時の商況を叙述すると而して騰落進止の動説明せる處者が經驗豊富なる氣魄と豪然喝破せる所以也蓋し市場利用行けの手段に往々機宜の變改を要すると雖も商賣骨法に至りては終始渝る處なし本書は實に其眞髓を敎へたるものにして市場利用者の好個の伴侶たるを失はず、附錄として最近五ヶ年株式史最近六十ヶ月東株高低圖表を添ふ。

植田好太郎編

勞働問題講話

四六判上製箱入 定價金壹圓五十錢 送料金十二錢

四版

本書は勞働問題の專攻家なる新進氣鋭の編者が實に半歲の苦心を費して權威ある各方面の理論と實際とに亙り系統的に綜纂解說したるものにして勞働問題の最新にして最高の總顧問たり。執筆者、北澤新次郎、米田庄太郎、平沼淑郎、龜田豊次郎、佐野利器、山川均、山川菊榮、賀川豊彦、外數氏

多惠春光著

新しい婦人の手紙

三六判美裝箱入 定價金壹圓 送料金六錢

再版

これからの婦人はどんな風に手紙を書いたらよいか、涼味の滴るやうな手紙、春の光のやうな手紙、心の溶けるやうな魅力のある手紙、嚴をも徹すやうな特權である手紙、これ等は本書を讀んだ者のみが書き得る特權である。

海軍中將 佐藤鐵太郎序
豐田敎嘉著

四六判總クロース箱入 定價金一圓三十錢 送料金八錢

三版

人間萬事 日蓮主義で行け

日蓮主義の權威たる佐藤中將、本書に長序を寄せて曰く、人間萬事日蓮主義で行け、嗚呼何たる痛快、何たる感激の主張ぞやと。世に「七轉八起」の語あり、著者は實に徒手空拳「十一轉十二起」して遂に成功せる奮鬪的青年實業家とす。是れ其不屈不撓なる日蓮主義的大信念の賜物にぞ。擧世混沌、薄志弱行の徒、國を誤らんとするの秋、著者憤然として躬行體現の一大信念を弘通すべく大獅子吼す。苟も現代日本を救ひ、且つ成功傳中の人たらんと欲する者は本書を讀め！！

濠州ビー・ムツシオ著
時國一譯

現代産業心理學講話

四六判特製箱入 定價金壹圓五十錢 送料金十三錢

再版

勞資協調は、合理的卽に科學的——心理的に融合解決されなければ、一時の感情主義的な繃糊塗に過ぎないものとなる。合理的解決、そは勞働能率の改善と産業民主主義の實現と相俟て始めて可能である。茲に世界的産業不安を救ふべきである。本書は勞働問題の最喧囂たる濠洲の實驗心理學者ムツシオ氏に據りて卒先提唱された！今や日本の資英米の同盟罷業は革命的となつた！諸君、日本の勞働者諸君、願くば本書を讀んで家諸君、速に産業破壞の危機を救へ！！！

黑岩周六序
渡邊貴知郎著

三六判上製 定價金一圓廿錢 送料金六錢

雄辯第一

再版

苟も改造世界に大獅子吼すべき新雄辯術、新雄辯法、新雄辯學、細大收めて此卷に盡く、況んや黑岩先生の長序文を以てするをや。本書を購求するは獨り現代青年の特權也。

農村改造講話

石田傳吉著　四六判上製　定價金一圓五十錢　送料金八錢

三版

世界改造の秋は來た。國家の根底を成す所の農村は、何者よりも先に改造せねばならぬ。而も其改造が、現代農民の生活を離れ、町村民の幸福を度外視するやうなものであつてはならぬ。著者は農村問題の權威、そが徹底的、實務的の解說を見よ六講八十餘章の大雄篇。

利益分配の理論と實際

米國二大學教授三會社々長著　橋本卓一譯　四六判三百餘頁　定價金一圓八十錢　送料金八錢

三版

資本家は本書に依て如何に生產能率の增進すべきかを知れ。
勞働者は本書に依て如何に生活狀態の向上すべきかを知れ。
社會改革家は本書に依て如何に人類幸福の伸展すべきかを知れ。

マルクス派社會主義

英國バスカル・ラーキン著　中目尙義譯　四六判三百頁　定價金一圓五十錢　送料金六錢

三版

本書の價値は社會主義の基調たる眞理を大膽に考察し社會主義の歷史的綱領を完明したるにあり、著者の批判や妥當、論理亦整々。未だ眞にマルクスを知らざる人は本書を繙いて彼の眞價を嚐るべく我國社會主義者たるもの亦本書に答ふる所なかるべからず。實にマルクス主義の「穀粒」と「殼」とは本書にあつて能く峻別せられたるを見る。敵も讀め味方も讀め!!!

合理的賃銀制度

英國、ヘンリー・アトキンソン著　松本悟朗譯　四六判約三百頁　定價金一圓四十錢　送料金八錢

三版

本書は時間査定法を基礎とする報酬制度なるものである。そして從來我々の耳に熟し居る利益分配制度や損益分擔制度や生產組合制度よりは一層合理的で一層完全に近いものである。勞働問題の日に日に切迫を加へつゝある今日本書の如きは蓋しその最好指針たるを失はない。

科學的經營法の理論と實際

米國バートランド・トムソン著　時國理一譯　四六判三百餘頁　定價金一圓八十錢　送料金八錢

再版

進化なくんば革命あるのみ。我が產業界の最大憂患は、勞資共に研究的態度の缺如に在り。職はゞ須らく研究的態度を以て職へ！本書は有名なるテーラー民の提唱せる科學的經營法の原則を明かにし、其原則に基く工場管理の實行に際して、如何にして其進化の方法を活用すべきかを詳說せるもの、是れ本社が熱心に既刊類書と共に、勞資兩方面に本書を提供する所以。

全譯社會改造の原理

英國ラッセル著　松本悟朗譯　四六判四百頁　定價金一圓五十錢　送料金八錢

增補六版

社會主義はパンの哲學、パンの宗教である。パンと思想、肉と靈、二者合一して吾人の生は始めて滿される。その思想と制度との上に合一境を打開せんとする要求は終にラッセルを生んだ。彼は來るべき世界の豫言者であり代言者である。世界は進轉す、マルクスよりラッセルへ！

農村改造か農村革命か

横田英夫著　四六判上製三百頁　定價金一圓六十錢　送料金八錢

三版

米價問題の合理的歸着點を明にしてに、農村勞働問題に及べる刻下緊切の大文字は是れ！
概目　一、農村の危機　二、解決難に陷れる米問題　三、米價の合理的歸着點を明にす　四、米價問題と食糧問題　五、米問題の解決は農村改造を要求す　六、農村勞働問題　七、農村問題の中心的對象　八、小作運動問題　以下數章

結婚心理學

英國ガリカン著　相葉久江譯　四六判箱入美裝　定價金一圓二十錢　送料金八錢

三版

戀と結婚と性慾と、今の世に此位誤解されて居るものは無い、悲劇と喜劇と不幸と幸福と、二度と無い人生の岐れ路は全く此等の科學的知識を有するや否やで定る。然も此知識を親切に敎へて呉れるものは無い。此人間の重大問題を心理學上から解剖し、生の歡喜に浴させようと若い人々の爲めに本書は書かれた。

改造途上の歐米社會見物

尾崎行雄序
田川大吉郎著

四六判四百餘頁箱入
定價金貳圓
送料金十二錢

三版

著者の歐米社會觀は、一々之れを日本の社會改造の實際に應用し得べき實際觀ならざるなし。況んや氏の周倒暢達せる筆路は讀者を誘ふて、そゞろに改造渦中の歐米市街に遊ばしめ其身親しく目睹耳聞するの思あらしめずんは已まざるや!!附錄「米國議會見物」は議會季節に入る今日特に讀むべし。

政治の理想

ラッセル原著
松本悟朗譯

四六判二百餘頁
定價金一圓五十錢
送料金八錢

忽五版

普通選擧の實現は民衆政治の根底である。然も無理想なる大多數の盲動は、愚民政治に陷り、暴力改治に陷るの危險がある。勿論「人民に依つての人民の爲の政治」は千古の鐵則である。然し乍ら問題は「何故」又「如何にして」の點にある。之が正しき解明を與へんが爲に、世界改造の使徒ラッセルは出現した。吾人は先づ彼れの政治哲學に聽かねばならぬ。然る後始めて諸君の普通運動は、深甚の意義を體現し來たらん。

自由への道

ラッセル原著
松本悟朗譯

四六判三百數十頁
定價金一圓五十錢
送料金八錢

忽五版

世界改造の使徒ラッセルの雷名は、今や世界萬民の舊夢を打破すべく曉の鐘の如くに鳴り響く。本書は彼れの祖國に於ては勿論自由の國米國に於ても既に百五十萬部を賣盡くし將に世界の讀書界を風靡せんとす。新生命に憧るゝ現代青年よ、來つて玆に卿等の渴を癒せ!

燃える襦袢

岩野泡鳴著

四六判四百余頁美裝
定價金一圓七十錢
送料金八錢

最新刊

小說界に一元描寫の開祖たる泡鳴氏の濃艷なる方面の代表作出づ而もその技巧や天衣無縫の圓熟!本集には專ら變つた女を材料としたものを集む。即ち燃える襦袢、藝者あがり、膝に飛び付く女、お仙四十女、醜婦、部落の娘

ガント式工場管理法

米國イーチ・エル・ガント著
法學博士 上田貞次郎序
商學士 蘆三郎譯

四六判上製箱入
定價金二圓五十錢
送料金十二錢

三版

上田博士本書を推賞して曰く、如何なる社會主義又は組合主義の社會にありても管理法の重要なる今日と異るの道理あるべからず、今蘆君の譯出せる一書はテーラー一派の著作中特に出色の一書なれば讀者は之に依て學得する所必ず多大なるはずと以て本書の價値を知れ。

農業と社會主義

カアペンター著
時國理一譯

四六判上製三百頁
定價金一圓四十錢
送料金八錢

三版

勞働運動は今や燎原の火の如く田園に及ばんとす農村勞働問題解決の基調たゝべき社會主義と農業の關係は如何、時代に目醒めし我が農村の人々よ速かに本書に依つて其歸趨を知れ!!

(概目) 村落と地主、農村人口減退の秘密・農業の國庫補助・農業の復活

改造の戰ひ

時事新報
倫敦特派員 伊藤正德著

四六判上製四百頁
定價金二圓廿錢
送料金八錢

三版

著者は時事新報特派員として血醒き戰亂渦中の英佛を踏破し、更に戰後改造運動の狂瀾を浴びつゝ實査三年有餘、歸來親しく觀、味ひ、感じたる所を統べて玆に全編十二章八十餘項の本書を成し、以て日本國民を提醒せんとす、殊に『英國革命の大陰謀』一篇の如き徹に入り、細を穿ち、國活寫縱横骨鳴り肉躍るの概あり凡て此改造史上の活事實!!

證券市場改造論

東京株式取引所
前文書係長 來栖健助著

四六判特製箱入
定價金參圓
送料金十五錢

三版

本書は著者來栖氏が取引所在職中辛苦研究の結果案出綜合せる斷案百七十項を載す。資本の證券化證券の民衆化を提唱したる空前の快著!!!

社會改造の諸問題

佐野袈裟美著　四六判箱入四百頁　定價金二圓　送料金十二錢

三版

世界の新學說を引證し來る百餘項宛然たる社會改造の大辭典！

民族性の研究

納武津著　四六判箱入四百頁　定價金二圓　送料金十二錢

三版

人間の先づ研究すべき恰好の題目は人間そのものではないか

新文化への道

野村隈畔著　四六判箱入四百頁　定價金二圓　送料金十二錢

三版

一切を破壞し一切の根柢に永遠の生命を吹き込むの力

勞働改造の原理

エレン・マロイ著　法學士　丸山茂樹譯　四六判箱入三百頁　定價金一圓六十錢　送料金十錢

三版

米國教育實驗局本書に序して曰て、本書は教育産業の兩見地より觀ても眞に緊要缺くべからざるもので各國の一日も早く此實驗に基礎を置いた實施の試みられん事を切望するものである」と以て本書の價値を知れ。

工場委員制度

ストッダード著　板橋卓一譯　四六判總クロース箱入三百頁　定價金貳圓　送料金八錢

最新刊

本書は最も多く勞資衝突に苦しめる米國に於て、目下驚くべき効果を擧げつゝあるショップ・コムミッテイを全譯せるもの、加奈陀前勞働大臣キング氏は『勞働問題解決に近づく最も確なる方法』と推奬せり。原理、方法、實例一々圖表を挿みて詳說す。

農民の聲を聞け

横田英夫新著　四六判上製三百頁　定價壹圓六拾錢　送料金八錢

最新刊

農民より觀たる米の問題、生産對消費闘爭と勞農關係、勞働同盟より農民同盟、農民と普通選擧問題、普選運動の缺陷及農民の態度、農民としての政友會批判、農村の階級的整理、小作料を金納とせよ、原因は一事結果は重大等三篇四十章の雄篇大論策!!!

國家社會主義の本質とその運用

タマス・ヒューズ著　高橋潛淵譯　四六判上製箱入　定價壹圓七十錢送料十錢

米國よりの脚本集

佐藤健著　四六判極上製箱入頗美裝　定價金二圓、送料十錢

炎のお七　アップル花嫁　腐れ武士

情か無情か

長編小說

岩野泡鳴著　四六判箱入美裝　定價一圓七十錢送料十錢

未知の國へ

野村隈畔著　四六判箱入美裝　定價一圓六十錢送料十錢

日蓮大學講師 井上惠宏著 四六判上製箱入 定價一圓八十錢送料十錢
日蓮遺文 新修養の道

高橋潛淵譯 四六判上製箱入 定價二圓 送料十錢
社會主義大系

文學博士大類伸序 四六判上製箱入 東洋大學講師下澤瑞世著 定價二圓送料十錢
日本歐洲 比較文化史

ウラオカー原著 辻潤譯 四六判上製箱入 定價一圓八十錢送料十錢
唯一者とその所有 人間篇

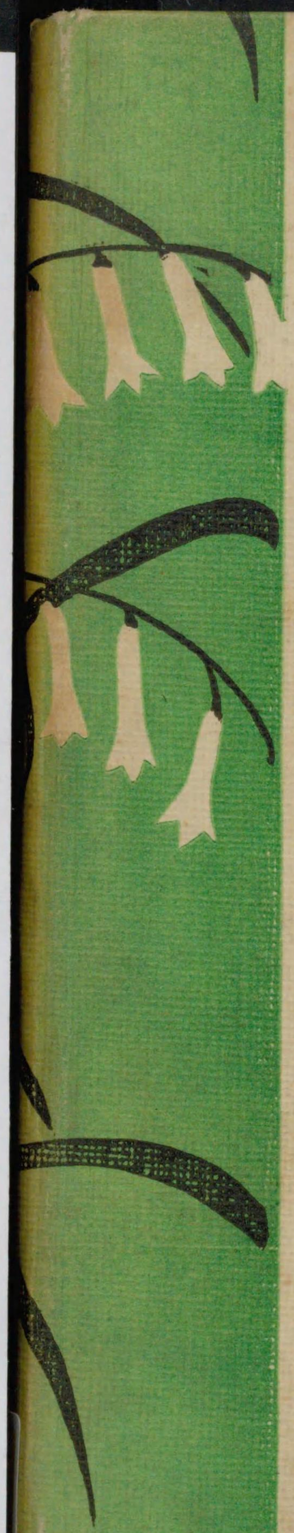
森下岩太郎譯 四六判上製箱入 定價一圓六十錢送料十錢
探偵小說 殺人團

英國マツケンヂー著 納武津譯 四六判上製箱入 定價金二圓送料十錢
社會哲學原論

淺野護譯 四六判上製箱入 定價二圓・送料十錢
米國を中心として觀たる 世界貿易の研究

グラエヴエニツク著 高村潛淵譯 四六判上製箱入 定價二圓六十錢送料十錢
革命の悲哀

伊藤公敬 菊半截美裝 根本正吉共著 定價一圓、送料六錢
勞働詩集 どん底で歌ふ

露國トロツキー著 茅原退二郎譯 四六判上製箱入 定價壹圓六拾錢送料八錢
露西亞革命實記

30